

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 5 月 20 日現在

機関番号：13301

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2014

課題番号：23520861

研究課題名(和文) 高句麗・渤海をめぐる中国・韓国の「歴史論争」克服のための基礎的研究

研究課題名(英文) Basic study for overcoming "history dispute" over Gaogouli/Koguryo and Bohai/Parhae between China and Korea

研究代表者

古畑 徹 (FURUHATA, Toru)

金沢大学・歴史言語文化学系・教授

研究者番号：80199439

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、中韓両国の高句麗・渤海をめぐる論争の経緯を明らかにしたうえで、次の3点の成果が得られた。

唐代の国際システムは、中国の「内」「外」と、指標によってどちらにもなりうる中間ゾーンという三層構造で、それは時代によって変動するものであること。高句麗はその三層構造の「外」の存在であり、渤海は中間ゾーンの存在で、時間経過とともに「外」に移行したこと、渤海史の叙述方法には、いくつかの歴史的な広域地域にまたがる存在として叙述する方法があること。

研究成果の概要(英文)：In this study, I clarified the process of "history dispute" over Gaogouli/Koguryo and Bohai/Parhae between China and Korea, and got three following result.

(1) International system of Tang dynasty was made of three-layer structure which consisted of "inner zone", "outside zone" and "middle zone", which might be sorted "inner zone" or "outside zone" by an index, and varied according to times. (2) In Tang dynasty, Gaogouli/Koguryo was positioned as "outside zone" of the three-layer structure, and Bohai/Parhae was positioned at first as "middle zone", but was changed to positioning as "outside zone" over time. (3) For a description method of the history of Bohai/Parhae, there is a method to describe as the place where some historical meta-areas mixed.

研究分野：東洋史

キーワード：渤海 高句麗 歴史論争 唐代国際秩序 冊封 靺鞨州 東北工程 歴史叙述

1. 研究開始当初の背景

高句麗(前37?~後668)は、現在の中国東北部と朝鮮半島北部にまたがる地域を主要な領土とした国家であり、その滅亡後に後継者を自称して建国した渤海(698~926)も、中心をやや北東に移動させたものの、やはり現在の中国東北部と朝鮮半島北部、さらにはロシア沿海地方を領有した国家である。これに加え、両国家ともに領域内に多数の種族を包摂する多民族国家(現在の民族概念と区別するためにあえて「種族」と使う。)で、滅亡後の遺民動向を追うと、それらの国の子孫は高句麗人を自らのルーツのひとつと認識している韓国・朝鮮人だけでなく、金・清を建国した満族などの中国東北地方の少数民族もその先祖はその領域内に居た種族の子孫であり、また高句麗・渤海の中核となった人々はその後の変遷を経て漢族のなかにも入り込んでいることが明らかである。したがって、高句麗・渤海とも現在の国民国家の枠組みでは把握しきれない存在であり、かつそれを前提とした一国史観的歴史理解ではその実像に迫りえない存在である。

しかしながら、現実にはこの高句麗・渤海の現在の国家・民族への「帰属問題」が存在している。この問題は戦前から存在し、日本の歴史学界も大陸進出との関係でこの問題に関わり、とりわけ「満州国」建国に関連しては、渤海の帰属をめぐる中国と論争になった。戦後も主に渤海の帰属に関して中国と韓国・北朝鮮との間の論争が続いていたが、1980年代以降、高句麗の「帰属問題」も次第に表面化するようになっていった。これが政治やマスコミの世界を巻き込んで大きくクローズアップされることとなったのが、2003年に発生し今も続く、中国と韓国の間で繰り広げられている「高句麗歴史論争」である。これは2002年に始まった中国の歴史プロジェクト「東北工程」が高句麗を中国史上の国家として位置づける研究を推し進めていることを、中国による韓国古代史の「強奪」と受けとめた韓国の学者・民衆がこれに激しく抗議し、外交問題にまで発展したものである。これを受けて、韓国政府は2004年には高句麗財団を、2006年にはそれを発展解消して東北アジア歴史財団を誕生させ、中国との「高句麗歴史論争」を日本との「独島=竹島問題」と並ぶ重要な歴史課題と位置付けている。

申請者は、長年、中国唐代期の東アジア国際関係史と渤海史を研究し、また高句麗史にも少なからざる業績を持っている。そうした関係から、2003年以降韓国で活発に行われるようになった高句麗史・渤海史に関する国際学会やシンポジウムに招待され、研究発表等をするようになった。しかし、そもそも申請者の高句麗・渤海研究は、一国史観に基づく歴史理解を乗り越えようとするところにひとつの重要な問題関心があり、高句麗・渤海の「帰属問題」それ自体が研究課題であっ

た。それゆえ、韓国に招待されつつも、その主張に迎合することなく、「論争」を冷静に見つめ、その克服につながる発言をしてきた。そんな折、幸いにも、2006・07年度の金沢大学学長戦略経費(重点研究経費)「東アジア共生の歴史的基礎と展望-ヨーロッパの経験を踏まえて」(代表:弁納オー)に参加することになり、「高句麗歴史論争」それ自体を分析する機会が与えられ、この「論争」の発端・経緯を明確にすることに成功し、その解決策についても一定の展望を示すことができた。本研究は、こうした研究成果の積み重ねの上に立って、進行しつつあるこの「論争」を乗り越えようという、高句麗・渤海の歴史像を描き出そうとするものである。

2. 研究の目的

本研究の目的は、中国・韓国の間で政治問題にまで発展した高句麗・渤海をめぐる「歴史論争」に対し、学術的観点からそれぞれの主張の根拠や背景を分析して、基礎的な歴史事実を確定し、かつそれに基づいて新たな高句麗・渤海の歴史像・歴史理解を提示して、この「論争」克服への道筋を示すことにある。

3. 研究の方法

本研究は、次の5つの検討作業で構成された。

- ・冊封関係を「宗藩関係」とみなす見解の妥当性の検討
- ・高句麗・渤海構成種族の滅亡後の動向
- ・中国が中国東北部を自国領と認識する過程の検討
- ・教科書・概説書を通して見た中国・韓国の高句麗・渤海認識の変遷の検討
- ・東北アジア歴史財団の動向の検討

はじめの2点は前近代史におけるオーソドックスな文献史学的研究方法を主とするものだが、それ以外は近代史、あるいは史学史の研究手法や、言説分析・フィールドワークといった手法を組み込んだ学際的研究手法を採る必要のあるものである。これらを組み合わせるとなると、すべてを同時並行で行うことは難しく、新たな高句麗・渤海の歴史像を描いていくには、年度ごとに重点を置いて段階的・総合的に研究を進めていくこととした。

4. 研究成果

(1)本研究課題の最初の年度(2011年)に、ロシア科学アカデミー極東支部および東北アジア歴史財団の招聘を受けて、ウラジオストク国際学術会議「高句麗・渤海史研究の新たな地平」(2011.11.28-29)に出席し、講演を行うとともに、中国・韓国及びロシア・北朝鮮の最新の研究を入手することができた。この関係各国がすべて集まるといって珍しい学術会議の内容は、「高句麗渤海史ウラジオストク国際会議参加報告」『唐代史研究』15号(2012)で紹介・検討し、最新の研究動

向として次の情報を提供した。

1 つ目は中国の研究動向で、中国の境域の発展に対する考え方として、前近代と近代に分けて「歴史上の中国」として時々変化したと捉える見解と、前近代・近代を区分せずに一連の発展と捉え、ネルチンスク条約以前を中国の境域が自然凝固する過程と捉える見解の2つがあり、高句麗・渤海の中国史占有を主張する論者は後者に属するという点である。2 つ目は、北朝鮮の高句麗・渤海研究が高句麗・渤海が中国史ではないという点のみに集中し、論証が自己撞着に陥り、学問的に非常に低い水準となってしまうことである。この点は韓国のレベルの高い実証的研究と鮮やかすぎるほどの対比関係をなしていた。3 つ目は、ロシアの高句麗・渤海研究が依然として極東考古学の伝統を引く考古学的研究ばかりであるという点で、その水準は高いものの、文献研究への展開はなく、文献理解のレベルは1950年代の水準のままであることである。ロシアの研究を扱う場合には、この部分が注意すべき点である。

(2)本研究課題の2年目(2012)に洛北史学会より洛北史学会大会：テーマ「歴史叙述と地域」(2012.6.2)におけるコメンテーター役を依頼され、研究成果を含んだコメントを発表し、それは翌年『洛北史学』15号(2013)に掲載された。そこでは、日本の歴史学界において1990年代に「地域」概念に対する深化があったこと、「地域」という概念には切り方によって多様性・重層性が存在すること、「地域」とはある指標によって切り取られた空間認識の枠組であり、歴史研究・歴史叙述において「地域」を扱う場合、いかなる指標によってその「地域」を設定したかは、研究・叙述の方法に関わる極めて重要な問題であること、これからの歴史学研究においては、「地域」の設定それ自体が研究・叙述の一つの方法であると自覚する必要があること、そして渤海こそがこうした<多様な「地域」による叙述>の典型例と考えられること、などを明らかにした。

ここで明らかにした方法論は、本研究課題の現在執筆中の『渤海国とは何か(仮題)』(吉川弘文館、刊行時期は2016年以降)に結実させる予定である。

(3)本研究課題の2年目(2012)に唐代史研究会より夏期シンポジウム(2012.8.21)での報告依頼があり、本研究でここまで検討してきた成果を発表した。そこでは、中国の「東北工程」のなかで出版された、「藩属関係」「宗藩関係」についての理論的な研究書を紹介・分析し、それらの研究の中では冊封をそのような関係とみる理解に否定的な結論が得られている事実を指摘するとともに、その分析を手掛かりに唐代の国際システムが「内」・「外」・「中間ゾーン」(指標によって「内」「外」の位置づけが異なる二重性を持ったゾーン)

の3つの階層で構成されていることと、渤海はその3階層の「中間ゾーン」に属し、時間の経過とともに「外」の存在として位置づけられていったことを明らかにした。また、高句麗についても言及し、かつて拙稿「1~7世紀にかけての倭と中国の朝貢・冊封関係の性質について」日本の中国史研究者の見解を中心に、『高句麗研究』18号(2004、ソウル)で示したように、これは終始、中国の「外」であったことを再確認した。

この報告をもとに、翌年、雑誌論文「唐王朝は渤海をどのように位置づけたか」『唐代史研究』16号(2013)を発表した。そこでは、報告に一部修正がくわえられ、筆者の主張する「中間ゾーン」の具体像として示した唐王朝の「羈縻州」の例が、実は石見清裕氏が定義をした「内地羈縻州」だけであったことを確認し、「外地羈縻州」が「中間ゾーン」であるかどうかをあらためて検討して、「外地羈縻州」も「中間ゾーン」に含まれることを明らかにした。また、「一国一羈縻州体制」の概念にも言及し、その成立を676年の新羅の朝鮮半島統一に求める理解は現在の「朝鮮」という概念に引きずられた間違った理解であり、当時の概念では新羅一国が雞林州になった時点で「一国一羈縻州」になったこと、同様の冊封号と羈縻州名の併存は唐王朝の西域支配に源泉があることを指摘した。

(4)(3)の学会発表と論文における、もう1つの重要な成果は、中国における边疆史研究がどのような現代的事情の中で誕生し、それがどのように「東北工程」に結びついたかを明らかにしたことである。つまり、边疆史研究をリードしている中国社会科学院中国边疆史地研究中心は、1982年の政府による少数民族の分離封じ込め方針と関係して民族研究所から分かれる形で1983年に誕生したため、当初より実証研究より現状肯定の傾向が強かったこと、天安門事件以後の中国再団結の機運が高まった1990年代に、同センターは边疆史と現状を結びつけた中国边疆学の構築を主張して発展したこと、そのなかで中国東北地方で起こっていた高句麗・渤海をめぐる中国の学者と北朝鮮の学者による論争に注目し、中国の学者へのバックアップを始め、それが「東北工程」へと発展したこと、を明らかにしたのである。これにより、「東北工程」が生まれる過程はかなりクリアーになった。

もう一方の論争の当事者である韓国を中心となっている東北亜歴史財団については、本研究課題の最終年(2014)の韓国調査でその誕生から発展の経緯のわかるオープンな資料を入手することができた。現在、それを整理中であるが、その成果の一部は『渤海国とは何か(仮題)』に記載する予定である。その他、調査は終了したが、その成果をまだ発表していない「高句麗・渤海構成種族の滅亡後の動向」「中国が中国東北部を自国領と認

識する過程」「教科書・概説書を通してみた中国・韓国の高句麗・渤海認識の変遷」の検討結果も本書で公表する予定である。

(5)本研究課題を遂行し、中国の渤海研究を確認している過程で、重要史料の一つである「張建章墓誌」に対する中国側の理解に大きな間違いがあり、それが韓国での理解にまで影響していることを発見した。その成果は、ウラジオストク国際会議(2011.11.28)、『日本古代の外交文書』出版記念シンポジウム(2014.1.26)にて口頭発表したが、論文としては未刊行である。これについては、2015年度未刊行予定の『東北大学東洋史論集』に掲載する予定で、現在論稿を執筆中である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 6件)

古畑 徹、[書評]井上直樹著『帝国日本と<満鮮史> 大陸政策と朝鮮・満州認識』、東洋史研究、査読有、72巻4号、2014、114-122

古畑 徹、唐王朝は渤海をどのように位置づけたか 中国「東北工程」における「冊封」の理解をめぐって、唐代史研究、査読有、16号、2013、38-67

古畑 徹、コメント(第14回洛北史学大会 大会テーマ<歴史叙述と地域>)、洛北史学、査読無、15号、2013、84-86

古畑 徹、[書評]赤羽目匡由著『渤海王国の政治と社会』、史学雑誌、査読有、121巻8号、2012、98-107

古畑 徹、高句麗渤海史ウラジオストク国際会議参加報告、唐代史研究、査読無、15号、2012、173-178

[学会発表](計 6件)

古畑 徹、中国「東北工程」の冊封理解と中国王朝の内外区分の考え方、東北亜歴史財団セミナー[招待講演]、2014年12月2日、東北亜歴史財団、ソウル、大韓民国

古畑 徹、張建章墓誌と『渤海国記』に関する若干の問題、『日本古代の外交文書』出版記念シンポジウム「古代東アジア・東ユーラシアの対外交通と文書」[招待講演]、2014年1月26日、國學院大学澁谷キャンパス1号館(東京都、渋谷区)

古畑 徹、渤海使の渡日航路をめぐる諸問題、第17回石川の歴史遺産セミナー「渤海研究の最前線」[招待講演]、2012年10月18日、石川県立歴史博物館(石川県、金沢市)

古畑 徹、唐王朝は渤海をどのように位置づけていたか 中国「東北工程」における「冊封」の理解をめぐって、唐代史研究会夏期シンポジウム「隋唐帝国論 宗教・法制・国際関係」[招待講演]、2012年8

月21日、文部科学省共催組合箱根宿泊所強羅荘(神奈川県、箱根町)

古畑 徹、『渤海国記』をめぐる若干の問題、ウラジオストク国際会議「高句麗・渤海史研究の新たな地平」[招待講演]、2011年11月28日、ウラジオストク、ロシア

[図書](計 0件)

[産業財産権]

出願状況(計 0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日:

国内外の別:

取得状況(計 0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日:

取得年月日:

国内外の別:

[その他]

ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者

古畑 徹(FURUHATA, Toru)

金沢大学・歴史言語文化学系・教授

研究者番号: 80199439

(2)研究分担者

()

研究者番号:

(3)連携研究者

()

研究者番号: